

大阪に於ける皇漢醫學の沿革に就て

490.9
2



大阪に於ける皇漢醫學の沿革に就て

(昭和三年三月十六日
大阪史談會に於て講演)

中野康章

私は講演と云ふやうなことは、頗る不得手なものであります。然るに、數日前、木村先生がわざわざお見えになりました。大阪史談會で、是非、和漢醫學の歴史上、大阪に關係ある事柄を、一部分でも宜しいからお話致せとの仰せでありました。一應は御辭退を申しましたけれども、強つてこの事で、無下にもと存じ、杜撰をも顧みず、暫時、御清聴を汚そうと、參堂致しました次第で御座います。



和漢醫と申しましても、元祿以後、學問上では、和漢洋互に相混融いたしました。従つて、事實上、東西折中派とも稱せらるべき諸家でも、各々特意とするところによつて、或は漢方とか、或は洋方とかと、相對峙して門戸を張つて居つたようであります。そこで、嚴密な意味で和漢醫と限ることは、困難な事情がありますので、本日は、和漢洋の孰れを問はず、大阪と離るべからざる關係のある諸大家に就て、總べて申し上げることにいたします。お話は極めて大要に止まると思ひます。それにしても、凡そ、沿革を申し述べ以上、本來ならば、先づ上古史に溯つて淵源を探り、ついで、神代から段々と時代的に區分を致し、他方醫術の諸分科をも顧慮し、系統立てて、それぞれの變遷を申し上げなければ、要領も得られ難く、且、御興味も薄い事と存じますが、御承知の通り、終日多忙を極め、寸暇を得ませんので、遺憾ながら、不秩序な斷片の補綴をもつて責をふさぐに過ませぬ、この点は前以つて御諒承をお願いいたします。

維新前までは、幕府の醫學館に於きまして、教科目は、現今の醫科大學と同様に専門に分れ、その教官は、

それぞれの専門科に就いて世襲の傳統を繼いで居りました。従つて其造詣は、代を重ねるにつれて、自然に深くなつた次第であります。特に課目中には、和漢醫學に關する歴史の一講座が設けられておりました。この事は、學問研究の爲めにも、將又、一國文化の保存上からも、至當な事で、誠に結構な設備であつたと思はれます。この歴史講座も無論家學的で、堀川家の擔當する所でありました。唯今では、その遺族も如何なりましたか、又、藏書類の行方も一向不明であります。文献上、誠に惜しい事で、彼思ひ併せますと、帝國大學にも、今の内に、此史學講座の設置される事が、事務を識るの舉ではないかと考へます。

是から史談にうつります。上古と申すと、何はさて置き、先づ醫祖、大穴牟遲神、少名毘古那神、この二神の御徳を稱へなければ筋が立ちませぬ。で、劈頭、その一節を述べます。「夫大己貴命與少彥名命戮力一心。經營天下。復爲顯見蒼生及畜産。則定其療病方。又爲攘鳥獸昆蟲之災異。則定其禁厭之法。是以百姓至今咸蒙恩賴。」と書紀に出てあります。此段を省略して衆人の眼に着く處に掲げてあるのは、市内東區道修町少名彥神社の石刻表であります。御通りの節御覽下されば良くお分りになります。併し、これは醫祖の功績を申上ただけで、醫學上の見地から史的觀察をいたしますと、此醫祖時代よりもつと以前の事で、古事記の序に録されてある、造化の創め、群品の祖と崇め奉る 伊邪那美神御崩御の時の状態を申さなければなりません。此段に、「病臥せり又遂に神避座しぬ」と、近頃の診斷書に見るやうな文字が判然と書てあります。又、書紀に「火神軻突智を生まんとするの時に悶熱懊惱めるにより吐をなす」と記してあります。そこで、御病氣であつた事、御難産であつた事。又嘔吐を御催し遊ばされたといふ事等は此一隻句から、神ながらの往昔の事ながら、歴然と想像することが出来ます。又、生あるものは必ず死すといふ哲言も、造化の神々がおん自ら死を示し給ふた事實によつて、如實に解決せられたわけであります。

尙、此外に神代史に顯れてある醫術及藥方等に關する一二の項を摘記いたすならば、古事記、天照大御神の御言葉に、「醉而吐散すところ」と申された處があります。これも立派な病症語のやうに聞えます。又、裸菟の段に、「水門にゆき水を以て汝が身を洗ひ其水門の滯黄をとりて敷散らし其上に輾轉なば汝身本の膚の如くいえなん」と教へられた事が出てあります。之等は全く菟の外傷に對する洗滌療法と理學的按法とを示されたものである。又、大穴牟遲神火燒の段に、ささ貝を黒燒として塗布した事が見えてをり、産科、産屋に就ては木花開耶姫の八尋殿、豊玉姫の鶉羽葺産殿の記載等挙げればまだまだあります。之等から考へてみましても、時代相應に發達した醫療方のあつたことは明かであります。

これから神代の内用藥について一言致します。古語拾遺、大地主神の段に、白猪、白馬、白雞、烏扇、蕙子、蜀椒、胡桃、塩など數へあげられてあります。漢方から申すと、烏扇は射干で、喘息や神經痛の特効劑として用られて居り、又、此頃、萬病妙藥注射液と銘うつて盛に使用されてゐるエキイニンの原料は、前述、蕙子であるさうであります。蜀椒、胡桃なども均しく漢方醫藥として今尙多量に用ひます。殊に、近頃大流行の蛔蟲驅除劑海人草は、日本特有のもので、支那の醫書には載つてゐませぬ、山脇東門先生の語に、「之、少名彥神の處方なり」とありますが、實に左様でもあらうかと思ひます。之等の事實を考へてみると、三千年の昔も、今と同様な藥物の使用されてゐた事が想像されます。

本題に入る前に、茲で一應、醫道の根源に溯つて、和漢思想の比較的考察を致してみたいと思ひます。支那古代に於て、醫學は帝王學の要素たる一科であり、神農氏は自ら毒を嘗め、黄帝は自ら醫道を岐伯に問ひ、以て民の疾苦を濟ふとある。即ち仁術の根據が帝王其れ自身の働きにあり、自身が帝王ともなり醫祖ともなり以て範を千歳の下に垂せられてゐる。然るに、日本は神代から理窟のない國でありまして、支那とは餘

程趣きが異つて居ります。我國では、醫藥に先つて、より神秘的な、鎮魂祭を行はせ賜ふ御儀があります。即ち上 天子が、下萬民の無病健康を神冥に御禱り下さるといふ御式で、上御一人の御仁心が萬民の頭上に、即座に靈感を垂れ賜ふことになり、誠に有り難き極みであります。此起源は、饒速日命の天降りの時に、天津御祖神が十種の瑞寶を賜ふて、天の下の青人草の煩ひ惱めるあらんには此十種の瑞寶を以て一二三四五六七八九十といふて布瑠部云々の御教にあります。この御儀は今も神代その儘で、神神を神殿にお祀り遊ばされ年々鎮魂の御祭事を行はせ賜ふとの御事でありますから、天津御祖の御仁心を御歴代の 天子がそのまゝ、御繼承遊ばすわけで、いはゞ、天子は即ち神代ながらの 天子、宮中も亦神代ながらの宮中であり、九重の雲一重の御輿は、今もなほ神代其儘の天上といふべきであります。誠に比類なき國柄と申さねばなりません。(大阪の國學者鎌垣春岡翁所説参照)

却説、之から神武天皇より慶長の初に至るまで約二千二百五十年間の醫事を概括して申上ます。先づ、醫道輸入の跡を辿つてみたいと思ひます。紀元四百四十二年 孝靈天皇七十二年に、秦の徐福が童男女五百人を率ゐて不老長生の藥を日本に求めた記録があります。徐福は秦の始皇帝の使はされた探薬使でありますから、醫道を司るもの即ち醫師と見て然るべきと思はれます。而してこの徐福東渡の記載が、醫道輸入に關する確かな最初の文献でありませう。徐福の事跡は種々の書物に出てをります、就中、楓岩樞話に、「至孝靈天皇。秦始皇遣徐市。入海居于紀伊州。其子福享。年一百八十死。爲熊野山守神」とあります。又、劉氏鴻書に、日本の學は徐福に起ると言ひ、淮南子にも同様な記載がありますので其一斑が推知されます。即ち徐氏の功績は實に醫道に關してのみでなくて、一般文化輸入者として最初のものである点にあります。徐福の墓は紀州熊野にあつて墓標が立つて居ると聞きます。今から約四十年前に、當時の清國公使黎昌庶氏が態々徐福の墓を

展された事があり、當時の紀行文を版本として知己に頒たれた。かく徐福は日本文化の偉大なる功勞者でありますから何とか慰靈の途が講せられぬものかと私は考へます。

藥師、醫師に關する最初の記録には、紀元千七十四年人皇十九代 允恭天皇記に、新良國主貢進の金波鎮漢紀武 皇帝の御病を癒し奉りきとあります。其後五十年 雄略天皇の朝、醫師を百濟國に徵した處、徳來といふものが來たとあります。この徳來の子孫が代々難波に居たので難波藥師と稱したとありますから、これが大阪醫史上第一頁に載せらるべき醫人であります。殊に、この徳來五世の孫惠日けいじつなるものが、倭漢直、福因等とともに入唐して醫を學び、推古天皇の時に歸つたとあります。孝謙天皇の寶字二年この惠日の子孫に、難波連の姓を賜つたと申すから、徳來氏一系と大阪の土地とは切つても切れぬ因縁つづきであります。次は紀元千二百十四年人皇二十九代 欽明天皇の十五年に、百濟國より醫士王有稜陀探薬使潘量豊寺を貢すとあり、又此頃からは名醫その他の歸化人が多くなつたとあります。此 欽明の朝に亦大阪に關係のある醫者が來ました。即、大伴佐豆古に従ひ歸化したる一人で善那と申す。この善那が長生をして難波長柄の宮孝徳天皇の朝に初めて牛酪を製して天朝に献上せられた處、天皇が甚く御褒めになつて和藥使主やまのくすしののみかみの號を賜つた。後名を福常と改めて子孫代々難波に居られたとあります。大阪醫史上、否、牛乳屋組合の方で何かと報謝の途が講せられては如何であります。

推古天皇の御宇に至りますと非常な勢で佛法が宣流いたしました、この風潮と關聯いたして、天皇の十年には、百濟の僧勸勤なる者が、曆、天文、地理及方術、遁甲等の書を献じました。又前述の徳來五世の孫惠日や福因等が隋の陽帝時代に留學生として彼土に渡り、居ること十五年、隋が亡び唐の代になつてから新羅を廻つて歸國した程でありますから、醫書傳來は無論のこと、良工名國手も澤山出來たとあります。もう此

時代になりますと、日本在來の醫方などは全く勢力はなく、高麗醫方もそろそろ下火となり、全く唐醫方全盛期に入つたのであります。この時代には醫者を藥師と稱し、この二字を冠らせて名を呼んだとあります。尙、藥師の階級を總稱して、歴史上、藥部と申しました。

醫道輸入期時代の史跡に就ては大体を申述しました。次に、本邦古醫書並にその著者の略傳を述べ、大阪と醫道との因縁に關説したいと思います。御承知の通り、奈良朝から平安朝にかけて、我國文化は著しく發達いたしました。文藝、美術、建築と各方面絢爛の美を競ひました、従つてまた醫道にも長足の進歩があり名醫師も續出致し、著書も澤山あつたと想像せられますが、古來傳來した目錄中にあり、且現存せるものは、そう澤山はありません。就中、次の六種を擧げて簡單に説明いたします。

- | | | |
|---------|--------|-----|
| 一、藥經太素 | 和氣廣世撰 | 二卷 |
| 二、大同類聚方 | 出雲廣貞等撰 | 百卷 |
| 三、本草和名 | 深江輔仁撰 | 十卷 |
| 四、金蘭方 | 菅原峰嗣等撰 | 五十卷 |
| 五、醫心方 | 丹波康賴撰 | 三十卷 |
| 六、醫畧抄 | 丹波雅忠撰 | 一卷 |

これら書籍の眞偽に就ても大切な問題がありますがそれは他日に譲ります。それにつけても、思ひ浮べますことは、書籍眞偽問題などは矢張り支那が本家で、悠悠泰然としたものである事でありました。彼の神農氏や、黃帝氏の作と稱せられる神農本草でも、素問でも、何の造作もなく、天邊から後人之僞作也と註して居ります。しかも平氣で推頌し且金玉よりも猶尊信して居り、その間に何等の邪曲わかまりをも挾ませぬ。此邊は支那的

と申すか、大國民的の襟度とでも申すか、或は大愚賢に近いものでありませうか、兎に角、偉大な素質がある様に思ひます。そこにゆきますと、日本人は總じて餘りに正直過ぎるのか、潔癖があるのか、乃至は内容の玉石を一々鑑識してゆく根氣に乏しいのか、餘程その態度に窮屈な点が認められます、如何なものでありませう。

一、藥經太素

此書は和氣廣世卿の著であります、和氣家は維新前迄代々典藥頭を奉仕せられた名譽の家柄であります。殊に御父清麿公は古今誠忠無二の士であり、御伯母即清麿公の御姉法均尼公は、此時代に於て既に孤兒院を創立して救濟の事業をせられてゐます。斯く一門救世の光明を放つともいふべき家門に人となり、夙に名譽の譽高かつた人の著作ではあります、但、恨むらくは、現今流布の本は、眞本に非ずとの事であり、併し本書は續群書類從中に編入せられてありますから御参考の爲御覽になるのは、いと易い事であります。

二、大同類聚方

本書は紀元千四百六十八年大同三年に、勅命によつて撰集せられたものであります。時の 帝平城天皇が世醫皆韓唐の醫道に心酔して、皇國傳來の古藥方を無視し、神方まさに地を拂はんとするに至れるを嘆かせ賜ひ、國造、縣主、諸國大小の神社、地方の豪族名家に傳承せる古醫方を徵收して、出雲廣貞、安部眞直等をして撰集せしめられたものであります。この廣貞は攝津の人で、方術に精しく、侍醫でありました。延暦廿四年、帝に御藥を奉り、功をもつて爵一等を進めらるゝ記録にあります。實に大阪は古來名醫發祥の瑞地のやうに感ぜられます。此書、全本、抄本、官版其他の版本、殊に難波兼葭堂の出版本に至るまで諸種ありますが、皆僞書との事で誠に残念な次第であります。

三、本草和名

此書は本邦本草書の鼻祖で、醍醐天皇の勅を奉じて大醫博士深江輔仁の撰ばれたものと傳はつて居ります。此書は偽書の稱を脱して美装の版本が流布せられてあります。深江氏の祖先は和泉の人とありますから、大阪には先づ近い縁のある方でありませぬ。

四、金 蘭 方

此書は紀元千五百二十八年 清和天皇貞觀十年菅原岑嗣等が勅命を奉じて撰したものであります。撰者岑嗣は前述出雲廣貞の男で、父に劣らぬ名醫であつて、淳和の朝に得業生に補せられたとあります。醫に得業生を置かれたのは、これが初めてであります。貞觀元年九月 詔を蒙つて備中國に遣はされ石鐘乳を採つたといふ記録がありますから、採薬使をも務められたと見えます。其後退いて豊島郡の山莊に居られた、結局大阪から出て大阪に還られたわけであります。本書も版本で流布せられてありますが、矢張、流布本は偽撰のうちに數へられてあります。

岑嗣と同時代の人菅原梶吉といふ薬師の傳が記録に残つて居ります。此人も攝津の人で天長八年侍醫に任ずとありますが、詳細は知る縁よすががありません。

五、醫 心 方

紀元一千六百四十二年 圓融天皇天元五年丹波康頼の撰述する處で、原本が現在も保存せられ、大本、小本と二通り傳はつて居ります。一本は仁和寺の寶庫に（この事は確實）、一本は半井家に傳はつてあるとの事でありませぬ。本書は實に古醫書中の神品でありまして、傳説によりますと、康頼の靈魂が始終本書を離れず守護して居るとの事でありませぬ。由來、和氣家が典薬頭を世襲して來たのでありますが、此康頼以來丹波家

も和氣家と兩立して、同要職を世襲いたし維新前迄及んで居ります。兩家とも均しく和漢薬を用ゐて居りながら、和氣家を和方家、丹波家を純漢方と稱し、兩家色彩の差鮮明でありました。これ恐らくは、我國醫道の根源に二種の潮流のあつた事を示すものでありませぬ。丹波家と大阪との間には、何等史的關係はありませぬ。

六、醫 略 抄

此本は 白河天皇永保年間に丹波康頼の曾孫雅忠の著述で、版本が流布せられてあります。偽書の稱はありませぬ。本著者は高麗王妃御惱の時、請診の名譽を擔ふたといふので、醫傳中最も喧しい名醫であります。歴史的に大阪との關係はありませぬ。

醫略抄時代以後は、政治上、源平時代となりませぬから、戦乱相つぎ、爾後約七百年間、慶長にいたる頃迄、日本文化の發達は總ての方面に亘つて全く阻止せられたと觀られます。従つて醫道の上でも、目星しい産物は先づありません。唯、この間に起つた一二の事項を注意をいたします。

この七百年の長年月間に、代表的著述として擧ぐべきものに、萬安方、頓醫抄の二書があります。其内容は兩者とも同類で、各五十巻づゝあり、花園天皇の正和年中、梶原性全の編であります。この人の傳は明かでありませぬ。多紀元簡先生の跋文にも、自ら和氣末孫と言ふとあれども審ならずと記してあります。但、後の學に志すものは、當時の乱世に處して、尙且、文事に潛心し、この大著を残した篤學者の心事のゆかしさに憧憬の念を禁じ得ませぬ。本二書原本は二部今尙完存してあるとの事でありませぬ。

尙、此七百年間大阪に關係ある醫事の記録は、餘りない様であります。唯一つ茲で堺の半井家祖先に就て一言申上げて置たいと思ひます。元來此家は和氣家の正統で、二十三代目の春蘭軒が京都烏丸に住居されました、主上御用の御薬を自家の井水を以て調製し奉ることを恐れて、井中に隔障を作り、半は御献上薬の

用に供し、半は自用にしました。此事が 後柏原院の叡聞に達し、半井姓を賜つたと傳へます。春蘭軒は永正の頃明に渡り、熊宗立なる名醫に師事し、彼地に於ても盛名を馳せ、時に明國王の病を治療いたしました。歸朝の際、銅人形、醫書大全、木像神農、熊宗立自筆稿難經解、米元章墨蹟、毛益犬之畫など持ち來つたとあります。此春蘭軒の孫が即ち半枚軒歌雲で、其惣領が半井養卜法眼である。家譜に、大阪町醫師、連歌花下にて狂歌名人の聞ありとある。養卜の狂歌集は版本として流布せられてあります。

以下徳川時代に移ります。慶長から明治迄の醫傳を詳細に申述ますことは御興味も御深い事で、演者の本懐とも致す處であります。時間の制限も御座いますので、中心人物とも観るべき儒醫約三十人を選び、其略傳其時代及び大阪との關係を申述ます。

古林見宜 松下見林 北山壽安 寺島良安 稻生恒軒 稻生若水 三宅意安 林一鳥 戸田旭山 永富
獨嘯庵 足立榮庵 香川南洋 和田東郭 麻田剛立 各務文獻 高良齊 橋本宗吉 華岡鹿城及南洋
岩永文恭及文楨 柘植龍洲 緒方洪庵及研堂 上瀧良山 田中華城等々

古 林 見 宜

徳川時代に於ける大阪の醫傳を編するものは、開卷第一に古林見宜を載せねばならぬ。見宜の傳を綴らんとする者は先づその學系を一瞥する要がある。足利の末季に二人の神秘超人的な名醫が出でた、一は道導三喜、他は甲斐徳本であります。三喜は明に渡り、醫術を學ぶこと十二年間、歸朝して李朱の方を弘めた人である。此門から出で、出藍の蹶があつた名醫が、彼の有名な曲直瀬道三翁であります。道三は山城の人、名は正盛、號は翠竹院、後陽成院に召されて寵遇を蒙り、橘の姓と今大路の氏を賜り、菊桐の御紋を 勅許せられました。天脈を拜診して譽あり、嘗ては著書啓迪集を叡覽に供して題著三字の御宸翰を賜り、策彦に 勅

命して序文撰録の榮を辱ふし、或は又、正親町院より屠蘇の法式 勅傳を蒙つた事もあつた。足利義輝、毛利元就、細川勝元、三好永慶、松永久秀等當時歴々の武將にして彼の診療を受けざるものなく、特に天正三年十月十四日織田信長公自ら今大路邸に入來、贈るに蘭香侍を以てし、後豊臣秀吉公入洛來邸に際しては、この名香を薫じて歡待した等高價な逸話が残つて居ります。致仕して享徳院と稱し、等皓、一溪、雖苦苦齋、蓋靜翁、啓迪院等はその號である。天正十一年、勅命によつて道三の名を甥玄朔に譲り、翠竹院の號は孫の守伯に、學寮、啓迪院の號は門人岡本玄治に、曲直瀬の氏は門人安養院正琳に繼がしました。(世に安養院本として流布せる書籍は此正琳の藏である。)かくて、道三は文祿四年八十九歳の高齡で没した、當時國內醫門の名家一として此門より出でざるはなしと言はれます。門下中安養院正琳などは錚々たるものであつた、正琳の息正純は即ち古林見宜の師である、斯く醫學の傳統を辿つてゆくと、見宜は今大路道三翁の曾孫弟子に當るわけである。

見宜は播州飾磨の産、天正五年の出生である。祖父古林祐村は明に渡つて醫を學び、歸るに當つて明皇帝より蜀錦を賜るとある。父は鬢庵と稱へ頗る醫名があつた。見宜名は正溫、桂庵又壽仙房と號す、稀世の逸才で、學、和漢古今に亘り醫學文學は固より、政治經濟の蘊蓄、手腕さへも具備して居つた人と見える。其人格は高德圓滿なる君子人といふ方でなく、奔放、不羈、加ふるに甚だ茶目氣あつて面白い風格を備へて居つた。しかも、彼の不朽の功績は醫學教育に畢生の力を注いだ點で、この事は特筆しなければならぬ。聖天子の思召も茲にありましたか、大正十三年贈位の御沙汰があつて、從五位に叙せられました。世に顯はれた見宜の事業の第一は、同門の友、堀正意とともに、嵯峨に學校を建て、四方に生徒を募つて醫學を教授した事でありませう。これが我國に於ける近代醫學學校の濫觴と觀るべきものであらう歟、幕府醫學學校創立に先つこと

實に百五十年であります。本嵯峨校は、併し、時流に合はなかつたか、不幸中途で廢しました。其後、福岡の黒田如水侯に仕へ、家中の臣の伏熱を治するに灌水法を用ひて功を奏した事がある。(餘談ではありませんが此灌水法とは所謂行水療法で、日本では伊邪那岐命の冷水を注がれしを以て始めとすと言へど、支那では既に傷寒論に出てあります。)見宜福岡に居ること数年、辭して居をわが大坂に定め、學舎を設け生徒を教授いたしました。邸は善安筋にあり、庭園には美しく連翹を植ゑ、見宜堂の扁額は黃柏隱元禪師の筆といふ、豪華な構へで、門弟の數實に三千人と注します。現今でも漢方醫が集れば談多く見宜の事に及びます、翁の子弟教育の功こそは實に千歲不磨の遺徳であらねばなりません。門下中逸足も多く、殊に松下見林の如きは翁の盛名をなさしむるに與つて功ある愛弟子であつた。教育者として一面の外に、醫家として當時多くの權門に出入致しましたが、不羈にして屈する風はなかつた。嘗て阿波侯の難症を治し、謝儀五十金を贈られしを尠しとして排け、老臣を鞭撻して、大酒樽百挺を門前に積み飾らせ、謝辭を貼せしめて快を行き、並せて宣傳をやつたと言ふ。和歌山の南龍公も見宜の治を請けた。京都所司代板倉勝重なども見宜の信者で、朝に斡旋して法印の僧位に叙せんとの内意があつた、見宜色をなして、「近時醫師皆僧官を帶ぶ名實乖り教を奉せず」とはねつけました。斯く一面率直にして忌憚する風はなかつた。が、當時朱子學の教化が重んぜられ、僧醫は舊に屬し、儒醫をもつて任ずるといふ風の起りつ、あつた事を想像するに難くない。見宜は明曆三年九月七十九歳にして大阪で没してゐます、高津禪林寺古林家墓所中本堂裏に石塚を廻らして建ててあるのが見宜の墓石であります。

私は三十年の昔東京を發つ時、大阪には今尙見宜の舊宅があるとき、着早々善安筋を捜しましたが得る處はありませぬでした。其後、元治二年の番附に、京丁假宅古林見宜とあります、此見宜は七代目であることが平瀬氏に贈つた詩で知れましたが、何時轉じたものか分りませぬ。遺族の行方は不明と思つて居りましたが、最近になつて、上福島南一丁目に酒屋を致して居ることが分りました。感慨無量であります。

松 下 見 林

見林は見宜門下の俊髦で大阪の醫師松下見朴の息、天滿に生る。其祖先は河内の人で、松下村に住して地名を氏とした。姓は橘、名は慶攝、又慶またの名は秀明、字は諸生、西峰山人の號があります。十三歳にして見宜の門に入り、十五歳で都講を務めたとあります。博覽強記、内外の典籍通ぜざるなく、殊に國典古實に明るかつたことは著述の上でも察せられます。年々長崎へ人を派して舶來書を求め、藏時十萬卷と言はれ、且、何人にも惜し氣なく自由に借覽を許したとありますから書籍に對する心事が付度されて一入懐しく感ぜられます。著書も數十部あります、就中、前王廟陵記、異禰日本傳、見宜翁傳等を讀ますと、見林先生の學問行狀の總てを知る事が出來、大阪に於ける學者記傳中第一に位する人として、私は深い尊敬、歸依の念を禁じ得ませぬ。元祿十六年十二月七日六十七歳で没し、墓は京都、上京區七本松下立賣、大雄寺にあります。明治三十年從四位を追贈せられました。

北 山 壽 安

壽安名は道長、壽安と稱し、又、友松子、仁壽庵、逃禪堂の號があります。父は明人で長崎丸山の妓を愛して壽安を生むとあります。歸化僧化林、獨立に就て醫學を學ぶ。初め小倉侯に仕へたが久しからずして辭し、東遊して益々その技術を研鑽した。其後諸國を巡歴して大阪の殷盛なるを喜んで此地に止つたと申す。性無欲恬淡、名利に携らず、常に貧窮に甘んじて居りました。時に、債務を責むるものに會へば高聲を發して、近頃の病家皆貧にして一錢の得る處なしと稱し知らざるもの、如し、偶々會津侯の病を療して賞金を得

るや忽ち門扉にその由を大書して債主を集め償却して剩す所なかつたと傳へます。元祿十四年没、北山不動寺の石像不動尊臺下に葬つたとあります。因に申す、私の師栗園淺田先生の遺骸も上野谷中、石像不動尊下に安住せられて居ります、時代の隔りはありますが、後世、同じく名醫の墓所として東西不動尊と併へ稱さるるやうになるであらうと思はれます。

寺 島 良 安

和漢三才圖繪百有五卷の大著述家として、將又、大阪に於ける名醫として二百年の長時日人口に嘖々傳稱せられながら其傳記の詳しく傳はらなかつたのが寧ろ不思議であります。僅かに三才圖繪の序文によつて、和氣仲安の門下生で名は尙順、別に杏林堂と號した事丈はよく知られて居ます。又國學に精しく書は定家流で能書の稱高かつたと傳へられて居ります。此頃良安先生の子孫が藥劑師となつて居る由を耳にしました。若し事實とすれば御目にかゝりたいものであります。

稻 生 恒 軒

恒軒は、元來、大阪の人で、見林と均しく見宜の門人であります。若水先生の父たるを以て、一層、世によく知られて居ります。名は正治、字は見茂通稱恒軒と稱し、淀の永井侯の侍醫であつた。永井侯の封を、宮津に移すや、翁も、従つてその地に到り、學舎を建て、生徒を教授したとありますから師匠の見宜に似た所があります。後、病を以て、辭して大阪に歸り、粉川町に、居を構へ、子弟の醫たらむとする者あれば毎に、誠めて曰く、醫を學ぶ、精しからざれば、た人^を害するのみ。況や、經世の業、以て、遠を致すべきをやと容易に、之を許さなかつたと傳へてあります。延寶八年正月七十一歳を以て没す。墓は、東區八丁目東寺町天龍院にあり。

稻 生 若 水

若水は恒軒の長男で、大阪で生れた人であります。初めの名は集義、後に、宜義と改め、字は彰信、通稱正助、若水と號しました。醫道は、父恒軒に、儒學は、木下貞幹に就いて學び、本草學は、當時、長崎で有名な本草家、福山徳潤と云ふ人が、大阪に来て、本草學の講義をしたので、若水も、その門に入つて研讀したのである。若水の長所は、特に、草木の鑑別に妙を得てゐたことで、常に人に語つて、吾をして天下の事を修理するを得しめば亦此草木に於ける如しと云つたとある。儒醫を以て、加賀の前田綱紀侯に仕へ、二百俵を賜はる。本草學に關する編纂に與り、參考圖書十二萬卷を購收し、刻苦經營二十年間の努力を以て、庶物類纂三百六十二卷を脱稿し、正副二本を作り、一本は幕府に、一本は前田侯に献じたことは、文献の佳話として、人の知る所であります。世に傳へて千卷を献すと云ふは、時の將軍吉宗侯が、甚く若水の業を嘉賞せられ、若水門下の、丹波正伯をして、繼續編纂せしめて千卷となしたものであります。何分この頃は、學問の有卦に入つた進運期で、本草家も、各二科専門の旗幟をかざして、ぼつ／＼門戸の衝突を見るやうになりました。併し、大家と稱せらるゝものは、西では、稻生若水、東では阿部將翁の二氏で、この二家の右に出づるものはなかつたのである。此両翁は本草宗の門跡と呼んでも宜しい。若水門下から、松岡玄達、丹羽貞機、野呂實夫出で、此、玄達門下から、津島如蘭、小野蘭山、岩永浩が出で、家學を講じた。將翁門下からは田村登、松井半兵衛など、幕府の役人學者が出でて、斯學の周旋を諸國に計つて居る。實に、本草學者林立の時代を作つたのである。若水年六十一才、偶々京都の客舎で、病没した、時は正徳五年七月五日で、明治四十二年從四位を追贈せられた。墓は京都市上京區眞如堂前北半丁、迎稱寺にあります。

三 宅 意 安

神代醫方の御話を申し上げ、又、和氣家は和方家として、典藥頭に歴任し來つたことを申しましたが、中古以來、實際、和方といふ藥方はあれどもなきが如く、専門的門戸を張り、神代の方藥を以て、治療に従事した醫師は、僅かに三宅意安先生一人である。先生は全く、和方中興の祖師であります。時恰も、國典復興の時代的機運に誘はれて、萌芽を發した觀はありますが、幕府の主義として、凡て、拜漢排和の政策を執つた時代、即ち、寶曆八年に、和方専門の門戸を此大阪の真中で開かれ、神醫方藥萬能の學説を講じられた自信方は、誠に、常人の企て及ぶことではないと思ひます。意安の後は、代々、意安の名を継ぎ、順慶町に居られたとありますが、今は全く分りません。本草家に東西の二大家がある如く西に意安が出るや。時代は稍遅れて、東に、佐藤方定が生れて、此二大家相拮抗するやうになりました。今、此二家を並べ見ますと、意安の和方彙函の序に、大彥命八十五世神裔 大邨主貞厚三宅意安甫誌とあり、此款を見ますと、光飾高く神代に映じ、實に意氣衝天の概があります。方定は、奇魂を著はして、烈公の褒詞を賜り、新論の序に、烈公の語を藉りて、公嘗慨世之好奇術異者類、貴海外藥、視我所産、猶馬渤之不若、世道人心之降、其弊一至于此也、云々と記してあります。謹嚴不可冒眞に憂國志士の風あり、能く、その意の存する所が知られます。此外に、和方を以て知られし人は、筑前に美和雞磨、阿波に天羽友仙が居ります、明治時代に入つて精研博識權田直助翁あり、神遺方、大同類聚方を註し、並びに、覆刻を斗り、古醫方經驗略、其他、和醫方の著述數十種ありと聞けども多くは世に傳はらず、門人井上頼園の如き、全く隠れたるもの如し。希くは、今の時に當り、意安、方定の如き俊傑の士、相次いで、出でんことを。

林 一 鳥

一鳥は奥州岩城の人でありまして、某侯に仕へて江戸に居り、田中元清と稱した人であります。後、諸國を漫遊して、自ら謂ふ。吾世に處る、譬へば、鳥の鹽々として、林間に飛翔するが如きものであると、姓名を林一鳥と改め、處を定めずに歩いた人である。大阪には、永く、止つて居たが、江戸で死んだとあります。此人は水腫を治する事が名人で、たゞ指を以て、三里を押し、其れで虚實を鑑別し死生を判断したといふことである。著述の中で、林一鳥治水方といふ一冊は、特に、醫家に貴重視せられて居ります。

戸 田 旭 山

燈臺下暗しとでも申しませうか、大阪に來て、旭山の何物も耳目に觸るゝことのないのは、單に失望と云ふだけでは解決はつかぬやうに思はれます。此、齊先生は奇抜な學者で、醫傳中では有名な人です。氏は戸田、名は齊、齊宮と稱し、旭山と號す。又、無悶子とも云ふ。備前の人で、家は代々鎗を使ふ家柄であつたが、旭山、軀軀が小さいので、逆も、鎗術で、身を立てることは、むつかしいと悟つて、醫となつたとあります。全科醫でありますが、本草が得意であつた。大阪に來つて居を構へ、其門表に、自ら草醫齊宮と書いて掲げられたとあります。當時痲病が、大いに流行しましたが、その治療には、齊宮、最も妙を得たので、其名が一時に高くなつたと云ひます。名醫、吉益東洞先生の、萬病一毒説に對し、治萬病歸一水毒の一家言を立て、自ら一家をなした豪傑であります。病人を診ること、日に十人と限つた。或時、その門人が、師を高槻に招き、名醫が來たといふので患者を澤山寄せた。然るに、齊宮之を喜ばず、弟子に向つて、お前は自分の名を以て金儲けをするのかと叱つたと書いてあります。大阪には一風變つた醫者である。藥價も餘分には受けず無理に贈られれば、僧侶に供養をしたといふから、誠に、信念の堅固な人であつた事が分ります。此頃、醫者中の文學者として、京に名高き香川修庵が、「藥選」を著はして、世に、もてはやされました。すると、齊先生、本草に通じて居りますから、其謬説を指摘し、「非藥選」を著はして、之れを駁撃した。然る

に、平生、修庵の才學に歸依し、自分の子を修庵の門に遣はして、學問をさせたといふ。誠に襟度開豁光風齊月といふ贊語は如斯人にして初めて、云ひ得らるゝだらうと思ひます。門人に、和田東廓が出て居ります。明和六年七十四才を以て没し墓は口繩坂法岩寺にあります。

永富獨嘯庵

我が國、解剖圖書最初の著者として最も名高き山脇東洋門下の俊才、永富獨嘯庵は、名を鳳、字を朝陽、通稱昌安と云つて、長門豊浦の人であります。本姓を勝原と云ひましたが、永富友庵の養子となつて、その姓を名のりました。幼にして豪氣、古人の節義を好んで、醫を心に介せず、十一才の時、百錢の錢を持つて郷里を飛び出し、江戸に到つて、山縣孝縞の門に入つて、群書を涉獵し、敏捷絶倫、人と對しては問答應酬、誠に板上玉を轉ずるの觀があつたといふ。二十才頃再び京都に來つて、東洋先生の門人となりました。性、豪放、大酒、高論漫罵到らざるなく、始末におへなかつたけれども、東洋先生、その凡器ならざるを愛して、その自由を許したといふことであります。獨嘯庵の名は、京都の方言に、放縱者を毒生といふので、偶々鳳先生をも、人、呼んで毒生と云つたことから自ら獨嘯庵と改めたといふことであります。漫遊雜記、吐方考、癰瘡口訣、疳論、讀傷寒論、葆光秘錄甲乙、及び詩文集等數部の著述がある。諸國を歴遊して後、大阪に居を定め、京の吉益東洞と併稱せられしも、惜しい哉三十五歳を一期として、明和三年に没した。充國といふ一子あつたのを、門人龜井南溟が引取つて、養育し、長じて後、五島侯に仕へたが、父に似て才物であつたとあります。獨嘯庵の墓は上宮町藏鷲庵にあります。

足立榮庵

醫傳中での、相當な學者であり、門人も多く、治療もなか／＼上手な人でありました。播州の人であります。すが、京に出て、時の、古方大家、後藤良山の門に入り、業成つて大阪で開業した人であります。家は代々、刀劔の掃除を業としましたが、榮庵は幼時より、人を傷ふことを屑しとせず、人を救ふ事を業とせんと志して醫者になつたとあります。温厚篤實な人で一生、娶らず、師匠良山の後の椿庵といふ人が夭折したので、その後をよく、世話をしたといふことが傳へられます。老年に及んでは、名所舊蹟を歴訪し、明和六年、七十七才を以て、門人 大矢尙齋の宅で終りました。この尙齋の後は三十年程前まで、やはり、醫者を業として居りましたが、榮庵のことは一向知つてゐませんでした。墓は姫路と難波瑞龍寺と二ヶ所にあるといふことであります。

和田東郭

天明の頃、京で、學術も實地も共に勝れた一對の名醫がありました。荻野元凱、和田東郭の二人がこれです。東郭名は璞、字は韞卿、通稱は泰純、別に含章齋の號がありました。高槻の人でありまして、大阪に來て、戸田旭山の門に入り、又、吉益東洞にも師事した人であります。寛政中御醫となり、後、法眼となりました。常に門人に語つて曰く、古人の疾を診する、色を望むに眼を以てせず、聲を聞くに耳を以てせず。聲色の、疾を察するに於ける抑も未なり。況んや、言語文字の外に假る者、焉んぞ、心得の妙を得るに足らんやと。この一句以て、その心術の、妙域に達した人であることが分ります。實に古來稀に見る名醫で、門人千三百餘人もありました。その子に、名は哲、字は哲郎、通稱泰冲といふ人がありました。東郭は年六十才享和三年二月三日を以て没しました。墓は京都烏邊山延年寺にあります。

香川南洋

香川南洋といふ同名異人が、大阪市内に同時に二人ありました。上町に居住されたのがこゝにいふ南洋で

京の香川修庵の甥であり、且その後を嗣いだ人であります。この人は播州姫路の人で、名は景興、字は主善又は孟公と云ひ、紙屋山人と號しました。修庵に養育せられ、伊藤東涯、後藤良山について學び、業を大阪で開いて、修庵のなくなつた後は、その業を襲いで、父名を辱しめぬ人でありました。序でに、今一人の香川南洋は、高麗橋東詰に開業して居られました。これは産科の香川家一系の人で、大阪を中心とする産科醫は多く、この門から出ました。

小石 玄 俊

文化文政の頃の蘭學主唱者中、關西に於ける先覺者は、先づ、小石玄俊をその第一人者と見なければなりません。若狭の人で、父と共に大阪に出で醫を業としました。初め、永富獨嘯庵に就いて學び、傍ら、蘭法を杉田玄伯、大槻玄澤に従つて研究し、頻りに、蘭法弘通の宣傳に努力された人であまりす。子元瑞は、頼山陽の縁者として、一層世に知られ、殊に、詩文が得意でありました。醫は漢蘭折中家に屬します。

麻田 剛 立

大正五年大阪に於ける贈位列傳中の一人として、天文學の第一人者として、醫學の先覺者として、偏なく人に知られて居りますから、こゝに縷述いたしません。麻田氏、名は妥彰、正庵又璋庵と號しました。杵築藩の人、大阪に隠れて醫を業とし、寛政十一年六十六才にして歿しました。墓は夕陽丘町淨春寺にあります。門人高橋作工門 間五郎右門共に從五位を追贈せられました。

各 務 文 献

整骨新書の著者として、木骨作者の始祖として名高い各務文献は、通稱相二、字は子徹、歸一堂と號しました。大阪の人で、その人となり魁偉倜儻にして小節に屈せずとありますから、尋常の人ではなかつたと思はれます。整骨新書の自序に、事は民を救ふより大なるはなく、功は世を補ふより深きはなし。能く救補の二事をなすもの、唯それ醫術あるのみ。とあります。これを以ても、その精神のある所が知られます。初め産科を修め、後、整骨に轉じた人であります。この整骨に轉じた際の逸話があります。文献嘗て、整骨を、難波の整骨師年梅に就いて尋ねました。然るに年梅、これを傳へなかつたので、文献は怒を發し、これ骨格の連絡を知らざるにありと、刑屍を解剖して、之を實驗すること數十回、而して、工人に命じて、木製の人體骨格を作らしめ、常に座右に置きて、諸生をして、手撫目察せしめ、よくその機關を曉らしめたといふ。文政二年其一体を幕府に獻じて賞賜を蒙つたとあります。同じ年六十五才を以て没し、夕陽丘洋春寺に葬られました。大正八年從五位を追贈せらる。

高 良 齊

私は二十年前、各務文献の遺族が、市内で洗濯婆さんとなり、文献の遺品二三點と、原稿を箱に入れたま、持つて諸所、雇はれ歩いてゐるからと救恤の相談を受けたことがありましたが、惜しいことに、其の運びに到らぬ間にゆくへを失つてしまひました。

橋 本 宗 吉

文政九年シーボルト幕府に謁するの時、二宮敬作と之れに従つたので、當時、冤獄に連坐した二十三人中の一人であります。後許されて、出獄し、阿波に歸つたとあります。元來、阿波徳島藩士で、祖父は、藩の中老職であつたと云ひます。良齊名は淡、字は子清、輝洲と號しました。大阪に居つて、篠崎小竹、緒方洪庵と交誼を結び、弘化三年四十八才を以て歿したとあります。大正八年從五位を追贈せられました。

橋本宗吉は、名を鄭、字を伯敏、通稱宗吉、絲漢堂と號しました。大阪の人で、堀江の傘屋の子であつた

と云ひますが、幼より、才氣煥發、凡ならざる所があつたと見えて、小石玄俊、間長涯の二氏が、相謀つて、家計を辨じ、宗吉を大榎玄澤門に入れて専ら蘭語を學ばしめたとあります。後歸つて、塩町に開業し、天保七年七十六才を以て歿しました。墓は寺町念佛寺にあります。

華岡鹿城及南洋

鹿城名は文獻、字は子徵通稱良平中洲と號す。彼の外科醫術をもつて令名天下に轟きたる華岡青洲先生の弟であります。青洲は眞に稀に觀る斯道忠實な士で、若し治療上自己の過失を認むる時は、逐一其症狀を記録し、早飛脚をもつて門下生に示教したと申す。鹿城、醫を吉益南涯に學びしも、兄と同様外科をもつて大阪中之島に開業し、並びに盛名がありました。世呼んで難波華岡と稱します。

華岡南洋は鹿城の嗣、諱は興字士諫南洋は其號。家業を承けて令名あり、慶應元年六十九歳を以つて没、父子共に墓は餌差町圓珠庵にあります。

岩永文恭及文楨

文恭は外科醫であります。大阪を中心とせる當時の外科醫は華岡、岩永の二系に岐れ、相對峙して勢力をなしたものである。華岡流は漢方を主として洋方を酌み所謂漢洋の折衷法たるに對し、岩永流は洋方を基礎とし漢方を加味した所謂洋漢の折衷法であつた。由來我國に於て初めて和蘭醫道の行はれた頃には外科を主として一に之を長崎流と唱へ、幕府からは吉田、栗崎、檜林の諸氏を遣はし學ばしめました。中に就き吉田氏は長崎に止り、栗崎、檜林二氏は幕府に歸り使へて二大勢力家となりました。岩永文恭はこの二流を合して自己藥籠中のもとなし自ら一派を立てた人で、日光准后様に御仕申した名譽の醫家であります。

文楨は文恭の女婿である。齋齋或は鐘奇齋と號す。家業を繼て夙に名あり、特に物産の學に精しく、京都

山本亡羊の門に入つて本草學をも研究し、其藏書の如き數千卷の多きに上つたとの事であります。

柘植龍淵

龍淵は南河内郡國分寺村の人。儒學を中井竹山に、醫を淺井圖南に學んだ。一体西洋醫學では蛔蟲の症候は殆んど擧げてありませぬ。私は三十年前某博士の講義中漢方醫の死亡診斷に蛔蟲病と認めたものがあると驚嘆されたのをきき愕然とした事がありました。龍淵は實に百年前蔓難錄五卷を著はして蛔蟲病のことを詳説されて居りますので、一寸次手に申し上げたのであります。

緒方洪庵及研堂

洪庵先生の傳記は既に御知悉のことですから申し上げます。要は御座いませぬ。唯先生が香川景嗣に就て歌道を學び國學を研究せられた事は如何に勢力絶倫の方であつたかを示すと、もに、英雄閑日月あることを證する逸事として私は奥ゆかしく感じます。更にもまた先生が庭内に大少二祖祠を建てられ、祭事を嚴肅に營まれた事も耳新らしい、且、聞く者をして襟を正さしむるに足る事實であります。

尙これは平田門の國學者岩崎長世翁と平瀬龜之輔氏との談話を傳へ聞いたのであります。惟準先生も亦長世翁を屈招して二祖神祭を嚴修せられた歌道に心を寄せられること深く、其歌集さへ出版されて居ります。斯く父子両先生とも敬神愛國の念の篤くあられた事丈を茲に申上げて置ます。

明治初年に官、大博士の學位を設け、醫家でこの榮位を勝ち得たものは東京順天堂病院の創立者佐藤尙中先生唯一人でありました。それに對して大阪では緒方研堂先生が一人尙中博士と對立されました。これが恐らく東京に對する大阪の博士の魁であります。

次手ながら、緒方家と相對し大阪の名家として盛ゆる醫家を列擧すれば、高安道純、大阪府立病院創立の功

勞者高橋正純軍醫で名高かつた堀内利國等の諸先生、其他吉田、柳、菊池、石神等の諸家等多士濟々であります。

上 瀧 良 山

良山名は義顯、字、喬文、通稱完二、良山はその號であります。筑後の人で久留米有馬侯の侍醫であつたが維新後東京に出て、和漢醫法復興運動に力を盡された人であります。當時漢法醫と申せども自信のあるものは極めて稀で、大底は洋方と折中であつた、唯一人良山は純然たる漢法醫で西洋氣はなかつた。明治十三年瓦町に廣濟病院を建て、純漢方を以つて治療に従事し、生徒を教授せられた。先生日常門弟子を戒めて曰く、往昔は孔夫子仁義忠道の正を説きて怪力亂神の異を語らず、謹で箴とすべし正法に怪鬼なし、醫は正法にして天地の公道なり、些の私議を許さず、然るに方今醫と稱するの輩、妄りに家傳名方を名として秘す此輩醫たるの理なし、實に之醫の俗にして賊たるものなりと、以つて醫術に對する先生の見識の一端を窺ふに足ると思はす。實地家としても亦先生は妙手であつた。嘗て一患者兩足痿痺立つ能はさること四ヶ年、洋醫之を療し術極り策盡く、良山爲めに一劑を投じ忽ちにして歩行するを得しめ、諸醫色を失へりといふ。治術の妙に達し盛名近畿に喧し。明治十四年七十九歳をもつて病歿す。墓は福島五百羅漢にあります。

田 中 華 城

先師の著皇國名醫傳の序を見る毎に田中華城の事を想ひ起されます。華城は明治十二年になくなられた方でありますから御承知の方もあるかと存じます。大阪の人で通稱内記、名は顯美藤澤東畝の門人で、詩文などには餘程骨を折られた様であります。廣濟病院長として一時は醫としても随分やかましかつた方であります。華城よりも名高かつたのは子の金峰で實に稀代の逸才であつたが不幸夭折しました。翁もこの寧馨兒を

襲つて非常に力を落され、庭際に金峰の靈祠を建て、朝夕物を供へ禮拜を怠らなかつたと申します。内室亦醫事を能くして診療にあつた、よく駕に乗つて診察に出らるゝのを目撃したとは京の本草學者山本章夫翁の直話であります、執れにしても奇人揃の一家であつたらしい。

この外にも、近來の漢方大家として、眼科で三井元瑞、小兒科で田中周庵、針醫で杉原三貞、灸醫で長門屋三右衛門が居りますが次回に申上ります。

一瞬の様に思ひますが、回顧すると私が最初大阪に参りましてから早や三十年になります。此間面識を辱ふした名醫には、高麗橋の山崎隆叔、木町の田中方庵、桃谷の長谷川玄龍、上福島の福田精平の諸老がありました。今は皆白玉樓中の人となられました。健在せられて居る方としては、南久太郎町の尾池惇五翁八十五歳、御影の山田連翁八十四才、漢方醫としては先づこの両翁を外にしてはありませぬ。

最後に大阪に關する醫史談の末に、奇な様であります。江戸の多紀家の畧系を申述べて終りを結びたいと思ひます。幕府時代に關西の地に於て醫學校を建て、その相談役であつたのは古林見宜であります。關東即ち幕府の醫學館は誰が建てたかと申すと、實に大阪出身の侍醫法眼多紀元孝先生の發意に出でたものであります。昔から學者三代と申しますが、此多紀家は例外で、十代も學者續であり、元孝先生は第五代目に當ります、家譜に元孝大阪町醫師、實は福島安清某男とありますから大阪人であつた事は明かであります。尙湖つて多紀家の祖先を調べますと、本夕古書作者傳中で申上げた丹波康頼であります。康頼十八世の孫に兼康といふ人があります。此人が家康公の康字を憚つて姓を金保と改め金保元泰、安齋と稱して幕府に召されたのが初めてあります。累次、元尙、元勝、元燕とつゞき、元孝は正徳三年三月二日元燕の養子となり、享保十五年十二月三日家督を繼ぐとあり、また元孝、本道に口中醫を兼ねとあります。延享四年十二月十九日本姓を

多紀と改め、明和二年四月十日醫學館取立の願書を出し、五月九日取立、場所共許可になつた。場所は神田佐久間町で、地所は拜借して講堂取立にて、同年十一月九日開講した。幕府醫師の弟子並に陪臣醫師總て醫道に志あるものは罷出づべきよし御府内へ觸れられたとありますから餘程聽講を官から懲憚されたものと見えます。元孝七十二歳にて歿し、三男元徳家督を継ぎ、同じく醫學館教授をかぬ、法眼永壽院安元と申された方であります。寛政三年十二月幕命により、長男元簡其他の助を借りて仁和寺宮御藏本の丹波康頼醫心方三十卷を寫し、寛政六年十一月には尾張家の大平聖惠方百卷を寫したとあります。元簡字は廉夫、通稱安長、桂山又は櫟窗の號があります。元簡の子、長は元胤、次は元堅、共に父に劣らぬ大學者で、爾來明治に至るまで家學系統一絲も乱れず續き來つた家であります。藏書の數實に十萬卷と注せられ、聿修堂書目とは實に多紀家の藏書目錄であります。此頃宋本孔穎達尙書が出版されるとき、ましたが、それは恐らく多紀本であらうと思ます、其故奈何と申すに、家譜に寛政八年七月十八日宋本孔穎達尙書槧本二冊を、獻せし處殘本も獻せよとの仰にて全部を獻したとあるからであります。私が今持參いたしましたのも多紀本であります。もと幕府の文庫にある御書樓無板本百十七部中、醫學に關するもの全部元簡先生が手寫されました、これは、そのうちの三冊であります。多紀家の普通藏本には皆多紀家藏印が捺してありますのに斯かる重要な寫本に何故藏印がないのか解しかねます。餘談は休題としまして、多紀家中興の元孝先生も亦實に吾大阪の出であつた一事を特に申上りまして本講演を終ります。

長々御清聽を賜つたことを深謝いたします。

16

非
賣
品

国立教育政策研究所



800068232